
振り向いて欲しい。

あくあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

振り向いて欲しい。

【Nコード】

N0915B

【作者名】

あくあ

【あらすじ】

私はあなたが好きなの。でも、私が想うのと同じにあなたにも好きな人がいる…ねえ…振り向いてよ。

(前書き)

好きな人に好きな人がいるっていう経験ありますよね？

『好きになったらしょうがないよ。』

「変質者はっけーん。」

電柱の陰に隠れてしゃがんでいる奴に、私は声を掛けた。

「あ！すいません！！……っってお前かよ。」

彼はかなりビククリした様子で振り返った。

「まぢで110番されるかと思ったし…」

「何してんのよ…（なら変なことするな）」

「わかんたろー！！ま・ち・ぶ・せ☆」キラリ

「はぁ？」

「だから静かにして！！」

『たとえどんな人にでも……』

「変なコトして振られないでね……」
彼は立ち上がってこっちを見た。

「何？心配してくれちゃってるの？」

「別に……そーいうわけじゃ……」

「大丈夫だって！まだ告白もしてないのにふられねえよ。」

「純……」

「？」

あるんだよ……想いを伝える前から

行き場を失ってしまう

私の恋心のように切ない想いも……

「頑張ってね」

それしか言えなかった。

純が私の背中に不思議な視線を送っているのが分かった。

「おはよー」

彼女は小倉翠。小学校からの親友。

「ああ翠。おはよー」

朝から私はかなりテンションが低い。

「何したの？何かあった？」

心配してくれる言葉が胸に響く。

「んーん。眠いだけ。」

ゴメンね。本当のこと言えなくて。

「まどかいっつも眠そうだもんね」

また1日が始まる。

今日も私の想いは大きくなっていくだろう。

【2－3】

「あ。純。朝どうだった？会えた？」
少し暗い表情の純に声を掛けた。

「あゝ…多田か…いやゝ…会えたよ？」

「なら良かったじゃん。」
ちくり。

「でもさあゝ…やっぱあっちにとって俺は友達なんだなあゝって思
って…」

自己嫌悪。と彼は苦笑いした。

「しょうがないよ。それは。一緒に登校出来ただけ良かったじゃん。
」
ちくり。

「待ち伏せまでしたしな。」
ふっと彼は笑う。

「純ー！ー！！前田呼んでるー！」

純はびくつとした。

「速水くお前さっき生徒手帳落としただろー」
前田章史がドアの前に来ていた。

「あー！！ああー！！」

純の頬は少し赤くなっていた。

「ほら。気づけよな。」

「あ…ありがとう。」

彼は下を向いてかなり恥ずかしそう。

どうしてなんだろう。

なんで純は彼を好きになったんだろう。

「じゃあな。」

「ああ…じゃあ…」

あんたの恋だって、叶わない率90%過ぎてるけど

かなり切ないし苦しいと思うけど…

でも…

長い間積み重なった私の想いは、

ちょっとやさっとじゃ消えてくれそうにないの……

「好きだなあ……」ぼそ…

振り向いて欲しいよ。

「何処が良いの？」

ニコニコしながら席に戻る純に私は聞いた。

「え？なにが？」

さっきの顔とはうってかわっている。

恋の力は偉大だ。

私の力ではあんたに何もすることが出来ないのに、

彼の行動で、あんたは浮きも沈みもする。

「だから、章史の何処が良いの？」

「え〜〜…」

照れるなよ。まあ照れるだろうけど。

「だって性格良いし、一緒にいて楽しいし…」
ちくり。

「そんなの女でもいるんじゃないの？」
ちよっとひどい言い方かも。

「なんだよ〜。あいつじゃないと俺ダメなの。」
ちくりちくり。

じゃあさ、あんたじゃないとダメな私は

どうしたらいいのよ…

なんて思っけていても届くはずはない。

「そっか…」

最近毎日こんな感じで過ごしてると思う。

泣きたくなるよ。

「どうした？」

優しくしないで。

「何でもない。」

こっち見ないで。

私なんか一緒にいても楽しくないんでしょ？

「何でもないだろう？」

「何でもないってば！！！！！！」

やばい！！！！つい怒鳴ってしまった。

「なんだよ…。もういい。」

ガタン

ごめん…純。

次の日

私の前で、純と章史が笑いながら登校していた。

「美貴？」

「え！？何？」

帰り道で、翠と話してるのに上の空になっていた。

「最近変だよ？私には相談できない？」

「ちが…ちがう…」

いつの間にか私の目からは涙が出ていた。

「美貴。純のこと好きなんでしょ？」

「なんで…ごめん。」

「言わなくても分かるよ。私達小学から一緒だもん。」

「……でも……。」

涙で言葉が出てこなかった。

「『純には好きな人がいる』……?」

翠にはなんでもお見通しだった。

隠す必要なんてなかったのに。

「純のこと、中学から好きなんだよね。」

どうしてわかってるんだろう…

言わなかった私は最低だ…

ごめんね翠…。

「伝えた方が良いよ。思い切り」

「え?」

「砕け散ったら私が美貴を拾ってあげるから。」

「みどり…」

「行ってきた。」

私はいつのまにか走っていた。

ピンポーン……

がちや…

「はい。」

「純。」

「多田？」

「あのね、私純に…」

「俺さ……振られた。」

え………？

「さっき前田に告ったんだ。」

「なんで…」

「小倉に多田のこと聞いて…」

「何を？」

「多田が好きな奴に想いを伝えられなくて悩んでるって。」

それで…？

「だから…俺がうじうじしてられないと思って。」

馬鹿じゃないの？

私のために告白したの？

振られるために？

「前田にも好きな奴いるんだって！」

彼は満面の笑みだった。

「私を勇気づけさせるために？」

「お前もさ、伝えた方が良いよ。」

そんなあんたが好きなんだ。

「多田が良い奴だってことくらい、俺知ってるから。」

あんたのお人好しには負けるよ。

「前田優しかったし。悔いもないし。スッキリしたー」

好き。大好き。

「純…私、純が好きだよ。」

「はは。」

純は笑った。私も笑った。

明日の私は、今までより少し変わっているだろう。

(後書き)

まだまだ勉強不足です……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0915b/>

振り向いて欲しい。

2010年12月13日18時53分発行